

## ポピュリズムを考える

### Examining Populism

板橋 拓己\*  
Takumi Itabashi

#### Abstract

Since the Brexit referendum and the election of Donald Trump in 2016, the term “populism” has become popular and widespread. However, it is difficult to say that there is a common understanding of what populism is. Based on recent research findings in political science, this paper discusses the following issues: the definitions of populism; the logic of populism; the populist political style; and the relationship between democracy and populism. Finally, I will examine some explanations for the rise of populism.

#### I. はじめに

「世界に幽霊が徘徊している。ポピュリズムという幽霊が」。ギタ・イオネスクとアーネスト・ゲルナーが論文集『ポピュリズム』で、このマルクスとエンゲルスの『共産党宣言』をもじった文章を記したのは、1969年のことであった (Ionescu / Gellner 1969: 1)。しかし、それから約半世紀経った現在ほど、この言い回しが相応しい時代はない。「ポピュリズム」は、いまや時代のキーワードとなった。

画期は2016年だろう。この年、EU離脱を問うイギリスの国民投票で離脱派が勝利し、またアメリカの大統領選挙で当初誰もがキワモノと思っていたドナルド・トランプが勝利した。そして、この大西洋の両岸で起きた「事件」を説明するものとして脚光を浴びたのが、ポピュリズムである。たとえば、『ニューヨーク・タイムズ』紙で「ポピュリズム (populism)」および「ポピュリスト (populist)」という語が用いられた回数は、2015年の671回から、2016年には1,399回と飛躍的に伸び、さらに2017年には2,537回となった。ケンブリッジ・ディクショナリーは、2017年の「今年の言葉」に「ポピュリズム」を選出している。

アカデミズムにおいても、「ポピュリズム」をタイトルに含む論文・書籍の数は一挙に膨大なものとなった。こうして、2019年にポピュリズム研究の動向をまとめたアムステルダム大学の政治社会学者Matthijs Rooduijnは、いまや「政治学においてポピュリズム研究はひとつのイン

---

\* 成蹊大学法学部 Faculty of Law, Seikei University

本稿は、2020年12月19日にオンラインで開催された成蹊大学アジア太平洋研究センター講演会での同名の講演にもとづく。

ダストリーになった」と結論している (Rooduijn 2019: 362)。

ではいったい、「ポピュリズム」とは何だろうか？ 実のところ、共通理解はない。日本のマスメディアでは、しばしば「大衆迎合主義」と訳され（後段で示すように、これは誤解を招く、あるいは問題のある訳語である）、基本的には負のレッテルとして機能していると言えよう。

南北アメリカでは、伝統的にポピュリズムという言葉は、平等をめざすシンボルでもあった。しかし、それでもトランプの登場以来、趣が変わってきた。前回および前々回のアメリカ大統領選では、共和党のトランプも、民主党のバーニー・サンダースも、「ポピュリスト」と呼ばれた。両者とも、「普通の人びと」の「怒り」を代弁する「反エスタブリッシュメント」であるという点では、少なくとも共通していると報じられたりもした。

またヨーロッパでは、フランスのマリーヌ・ル・ペン（国民連合）やオランダのヘルト・ウィルデルス（自由党）ら移民排斥を唱える人たちが、ポピュリストとして紹介される。その一方で、ギリシャのシリザやスペインのポデモスら反緊縮派の左翼も「左派ポピュリスト」と呼ばれる。

こうして共通理解のないまま「ポピュリズム」や「ポピュリスト」という言葉が政治的言説に氾濫し、いまや「ポピュリストのインフレ状態」（ハンスペーテル・クリージ）、あるいは「誰もがみなポピュリスト」（ヤン＝ヴェルナー・ミュラー）といった感がある。

そもそも populism という語は、「人民 (people)」と「主義 (-ism)」から構成され、素直に訳せば「人民主義」である。そして、政治家が「人民」に訴えかけるのは、とりわけ選挙を実施する民主政では、望ましいことではないだろうか？ 別の言い方をすれば、民主政では「大衆迎合」は、程度の差はあれ、普通のことではないだろうか？ では、何が問題なのだろうか？ 以下では、近年の政治学の成果を参照しながら、ポピュリズムについて考えていきたい。

## II. ポピュリズムの定義

まずはポピュリズムの定義を確認しよう。第一線のポピュリズム研究者が集った『オックスフォード・ハンドブック・オブ・ポピュリズム』(Kaltwasser et al. 2017) は、代表的なポピュリズムの捉え方について、①理念的 (ideational)、②政治戦略的 (political-strategic)、③社会文化的 (socio-cultural) という三つのアプローチを紹介している<sup>1</sup>。

第一の理念的アプローチによる定義は、現在の学界で最も優勢なものと言える。このアプローチは、ポピュリズムを「一組の理念 (a set of ideas)」と捉える。典型的には、日本語にも訳されたミュデ（およびカルトワッセル）の次の定義が挙げられよう。

社会が究極的に「汚れなき人民」対「腐敗したエリート」という敵対する二つの同質的な陣営に分かれると考え、政治とは人民の一般意志（ヴォロンテ・ジェネラル）の表現であるべきだと論じる、中心の薄弱なイデオロギー（ミュデ／カルトワッセル 2018：14）

あるいは、拙訳でやはり日本語版が出版されたミュラーの定義もこの範疇に属する。

<sup>1</sup> モフィットによる最新の入門書は、「理念的」「戦略的」「ディスカーシヴ＝パフォーマティヴ」という三つのアプローチを紹介しているが、これも概ね上記ハンドブックの三つの分類に対応している (Moffitt 2020: Ch. 1)。

ポピュリズムとは、ある特定の政治の道徳主義的な想像 (*moralistic imagination of politics*) であり、道徳的に純粋で完全に統一された人民 [……] と、腐敗しているか、何らかのかたちで道徳的に劣っているとされたエリートとを対置するように政治世界を認識する方法である (ミュラー2017: 27)

両者の定義から明らかなように、ポピュリズムという理念の根底には、「人民」と「エリート」の二元論があり、さらに「人民」はひとつの「一般意志」を有しているという前提がある。また、そこで「人民」と「エリート」の区別が道徳的なものであることは重要である。なぜなら、ポピュリストが政権を握ったとしても (= 一見「エリート」になったとしても)、「腐敗したエリート」を再定義することで、反エリートの主張を維持することができるからである。

また、「薄い」イデオロギーであるポピュリズムは、他のイデオロギーに寄生する。たとえば、ポピュリズムは、ナショナリズムとも新自由主義とも社会主義とも結びつくことができる。ポピュリズムは社会のある特定の不満を背景に出現するが、その不満の内容が寄生先のイデオロギーを規定し、それがまたポピュリストによる「人民」と「エリート」の区別のあり方にも影響を与えるのである。

このようにポピュリズムは変幻自在で、それ自体では中身に乏しいイデオロギーである。しかしそれはまた、二つの明白な敵をもつ。ひとつは、当然ながらエリート主義である。政治は人民の一般意志を表現すればよいのだから、エリート主義は悪に他ならない。

もうひとつの敵は、多元主義である。多元主義とは、政治は妥協や合意によってできるだけ多くの集団の利害や価値観を反映すべきだという考え方であり、人民／エリート、善／悪の二元論的なポピュリズムとはまさに対極にある<sup>2</sup>。

さて、第二の政治戦略的アプローチとは、カリスマ的リーダーによって利用される政治戦略としてポピュリズムを定義するものである。その代表的な研究者であるウェイランドは、次のようにポピュリズムを定義している。

[ポピュリズムとは] ひとつの政治戦略であり、それを通して個性的な指導者 (a personalistic leader) は、大部分組織化されていない多数の支持者からの、媒介も制度化もされていない直接的な支持に基づき、統治権力を求めたり行使したりする (Weyland 2001: 14; id. 2017: 50)。

第三の社会文化的アプローチも、政治戦略的アプローチと近く、とりわけポピュリストの政治スタイルに着目したものと言える。このアプローチを代表する研究者オスティグイは、政治空間における「上層」と「下層」の次元 (high-low dimension) に着目し、ポピュリズムを「『下層』の誇示 (flaunting of the "low")」だと定義した (Ostiguy 2017: 73)。たとえば、意図的に無作法にふるまったり、タブーを破ったりする政治スタイルをポピュリズムとするのである。

他にもポピュリズムの定義はさまざまであり (Pappas (2016) は20通りのポピュリズムの定義を挙げ、6類型に整理している)、いずれにも長所と短所がある。とはいえ、繰り返しになるが、最も標準的なのはミュデやミュラーらに代表される理念的な捉え方であり、本稿の後段もそれを前提として話を進める。以下では、とりわけミュラーの研究に依拠しつつ、ポピュリズムの

<sup>2</sup> 以上のような理念的なポピュリズムの捉え方は、簡潔かつ明晰というだけでなく、理論的研究や質的研究はもちろん、量的研究でも扱いやすく (とりわけ内容分析)、比較研究に適しているという学術上の利点もある (Mudde 2017; Hawkins et al. 2018)。

ロジックやポピュリストの政治スタイルを検討していきたい<sup>3</sup>。

### Ⅲ. ポピュリズムのロジック

ポピュリズムの論理には、「単一で同質的で真正な人民」なるものが存在するという前提がある。そして、その単一の「人民」を代表するのがポピュリストである（この意味でポピュリズムと代表制は対立しない）。ポピュリストは、人民の「一般意志」を認識でき、それを政策として実行できると主張する。また、彼らは政治的なライバルを「人民の敵」と呼び、その排除を求める。

つまり、ミュラーが再三強調するように、「自分たちが、それも自分たちだけが、人民を代表している」という主張こそが、ポピュリズムの核心なのである。これはつまり、一部の人民のみが真の人民なのだという主張に他ならない。たとえば、イギリス独立党の党首だったナイジェル・ファラージは、2016年のブレグジット国民投票の結果を「真の人民の勝利」だと言祝いだ。彼の議論では、イギリスのEU離脱に反対した48%の人びとは「真の人民」ではないのである。また、トランプは、2016年の選挙キャンペーンで、「ただひとつ重要なことは、人民の統一（the unification of the people）である——なぜなら、他の人びと（the other people）などどうでもよいからだ」と述べた。ミュラーがこの演説を重視するように、これこそが典型的なポピュリストの主張なのである（ミュラー2017：vii, 29）。

またポピュリストたちは、＜純粹無垢で勤勉な人民＞と＜腐敗し墮落したエリート＞とを対置する。右翼ポピュリズムにおいては、それに＜怠惰な社会の底辺層＞が付け加わるだろう。このようにポピュリズムは政治の世界を道徳主義的に把握するわけだが、しかし糾弾対象が実際に「腐敗」や「怠惰」である必要はない。実のところ、現実には民族的・人種的な基準が適用されている場合が多い。たとえば、アメリカに「福祉の女王（welfare queen）」という表現がある。これは、社会福祉で女王のような生活をしている人という、福祉に反対する保守派が用いるレッテルだが、その際に誰も「福祉の女王」が白人だとはイメージしない（ミュラー2017：32-33）。ポピュリズムは、ナショナリズムや、民族・人種に基づいた排外主義と結びつきがちなのである。

また、ポピュリストにとって「人民」は、民主主義の制度的な手続きの外部にある擬制的な存在である。それゆえ、彼らが解釈する「人民の意志」は、選挙結果とは異なる。こうしてポピュリストは、選挙結果が自分たちに不利だったとき、それが「真の人民の意志を反映していない」と言い張ることができる。これは、容易に陰謀論と結びつく。たとえどれほど民主主義的な制度でも、「腐ったエリート」が舞台裏で不正を働いていると言い募ることができるのである。たとえば、2020年の米大統領選挙のときのトランプを想起してほしい。彼は、選挙結果が出たばかりの11月11日、「人民はこの不正に操作された選挙を受け入れないだろう！（People will not accept this Rigged Election!）」とツイートした。このツイートは、ポピュリズムと陰謀論の親和性を鮮やかに示すものである。

<sup>3</sup> 以下、Ⅲ節からⅥ節までの議論は、ミュラー2017に大きく依拠する。

#### IV. ポピュリストの政治スタイル

ポピュリストは必ずしもカリスマ的なリーダーを必要としない。たとえば、ドイツの右翼ポピュリズム政党「ドイツのための選択肢」には、これといったリーダーは存在しないが（むしろ内紛続きである）、一定の支持を獲得している。

ポピュリストにとって重要なのは、カリスマというよりも、「人民」と直接つながっているという感覚を、人びとに与えられるか否かである。それゆえポピュリストは、自らと「人民」のあいだの存在、すなわち中間団体や「仲介者」を嫌う。同様のことは、既存の主流メディア、マスメディアについても言える。政治学者の水島治郎が巧みに表現するように、ポピュリストの政治は、既成団体や主流派メディアといった「中」を抜いた、いわば「中抜き」という手法に基づいているのである（水島2020：27）。

こうしてポピュリストは、既存のメディアではなく、いわゆるオルタナティブ・メディア、とりわけSNSを好む。たとえば、イタリアの「五つ星運動」は、バeppe・グリッロのブログが生んだといって過言ではない。もちろん、ここでも最も典型的な例は、トランプのツイッターアカウントだろう。ブログやツイッター、フェイスブックを通じて、ポピュリストは「真の人民の声」を聴き、また「真の人民」はポピュリストに自らの体現者を見るのである。そして、SNSがもつ「エコーチェンバー効果」（似た考えの持ち主がつながりあうことで、特定の思想や価値観が増幅されていく現象のこと）によって、こうした状況は純化されていく。他者の意見は拒絶され、ポピュリストたちは期待通りのことをつぶやくのである<sup>4</sup>。

#### V. 権力を掌握したポピュリスト

近年蓄積されてきたのが、政権についてのポピュリストの研究である（Albertazzi / McDonnell 2015）。かつては、ポピュリスト政党は取りも直さず抗議政党であり、もし政権につけば、反エリート主義的なスタンスをとれなくなる一方、選挙戦で掲げていた非現実的な政策は実行できず、魅力を失うと想定されていた。

しかし、ポピュリストにはポピュリスト的な統治手法がある（ミュラー2017：53-63）。まず、ポピュリスト政権の失敗は、「真の人民」に属さないもの、すなわち国内の抵抗勢力、あるいは外国や国際社会の所為にされる。すでに見たように、ここでもポピュリストの主張は陰謀論と結びつく。また、政権についてのポピュリストは、人びとを「真の人民」と「人民の敵」に分け、分断を煽り続ける。そもそも社会は多様で差異が広範に存在するので、彼らが「ネタ」に困ることはない。

近年のポピュリスト政権の好例としては、ハンガリーのオルバーン政権やポーランドの「法と公正」政権がある。彼らはいずれも、官僚の非党派性や司法の独立性を脅かしている。またこの二国では、報道や学問の自由も脅かされている。その際、ポピュリスト政権が単なる権威主義体制と異なるのは、「人民」の名のもとに、そうした政治を行っているということである。そのため、たとえ腐敗や依怙臆鼠が暴露されても、それが支持者の目に「われら人民のため」の行為と映るならば、評判をそれほど落とすことはない。

<sup>4</sup> なお、興味深いことにドイツの歴史家ウーテ・ダニエルは、ヴァイマル共和国時代と現代の類似性として、メディアや世論が分断され、そのなかでそれぞれの陣営が「エコーチェンバー」によって、自分たちにしか通じない意見や感情を増幅させていく状況を挙げている（ダニエル2019：46-48）。

最近の興味深い例を挙げよう。ヨーロッパで最大の右翼ポピュリスト政党のひとつであるオーストリア自由党は、2019年5月に発覚したスキャンダルから政権離脱を余儀なくされ、同年9月の総選挙で大きく支持を落とした。これは、そのスキャンダルの内容が、自国のメディアをロシアという、どう見ても「人民」の外部に売り渡そうとしたことが判明したからであろう。

## VI. ポピュリズムと民主主義

さて、ここまで理想的アプローチに依拠しながら、ポピュリズムの特徴を論じてきた。とはいえ、一口に理想的アプローチと言っても、ポピュリズムの見方については、論者によって相当な立場の違いがある。たとえば代表的な論者ミュデは、「ポピュリズムは本質的には民主的」だが、「リベラルなデモクラシーとは相性が悪い」と述べる。そうした議論に対してミュラーは、ポピュリズムがデモクラシーそれ自体を毀損していると強調する。

ミュラーによれば、ポピュリズムが攻撃する諸権利、すなわちメディアの複数性や言論および集会の自由、マイノリティの保護といった政治的諸権利は、(ミュデらが想定するように)単に自由主義(リベラリズム)あるいは「法の支配」のみに関わるものではない。それらは、民主主義それ自体を構成するものなのである。たとえば、もし野党が自らの主張を適切に訴えることができず、ジャーナリストが政府の失政を報道することを妨げられているとすれば、果たしてその選挙は民主的なものと言えるだろうか。こうしてミュラーは、ポピュリズムは自由主義のみならず「民主主義それ自体を傷つけている」と主張するのである(それゆえミュラーは、ファリード・ザカリアが使用して広まった「非リベラルな民主主義」という呼称を厳しく退ける)(ミュラー2017: 64-76)<sup>5</sup>。

## VII. ポピュリズムはなぜ台頭したのか

では、ポピュリズムはなぜ台頭したのだろうか。ポピュリズムが発生する原因は何だろうか。なぜある国・地域ではポピュリズムが台頭し、他のところではそうでないのか。現在の政治学はこの問いにさまざまな角度から取り組んでいるが、大雑把に言えば、経済的な説明と文化的な説明の二つの流れがある(Noury / Roland 2020: 429-434)。

第一の経済的な説明だが、典型的には、経済的不平等の存在、あるいは貧富の差の拡大こそがポピュリズム台頭の原因だという議論である。いわゆる「グローバル化の敗者」テーゼもこれに属する。とはいえ、それほど不平等ではない国(たとえば北欧諸国)でもポピュリズムが台頭していることに鑑みると、格差や不平等の存在がそのままポピュリズムの原因になるわけではない。

ここで注目すべきは、客観的な格差・不平等に加えて、人びとが抱く経済的な「不安」である。つまり、経済的要因が重要だとしても、客観的な指標以上に、主観的な指標(たとえば「相対的剥奪感」)の方が、ポピュリズムの台頭を説明するには有益であることが多い。

<sup>5</sup> とはいえミュラーは、非民主的な体制、すなわち人民を代表すると言いつつ、実際には大部分の人民を排除している体制下において、「人民」を掲げて闘うことの正統性はむしろ認めている(ミュラー2017: 84-91)。たとえば、1989年秋の東ドイツにおける反政府デモのスローガン「われわれこそが人民だ!(Wir sind das Volk!)」が好例だろう。

また、関連して福祉国家のあり方も、ポピュリズムの台頭を左右する。田中拓道が指摘するように、福祉制度が（普遍主義的ではなく）選別的であればあるほど、「われわれ」と「彼ら」という線引きが生じやすく、排外主義的なポピュリズムが台頭しやすくなるのである（田中2020：第5章）

第二の文化的説明については、インゲルハートとノリスの分析が有名である（Inglehart / Norris 2016; Norris / Inglehart 2019）。それによれば、「権威主義的ポピュリズム」の台頭は、社会の価値観の変化、すなわち脱物質主義的な価値観の主流化に対する「文化的な反動（cultural backlash）」が原因である（もともと2016年の論文ではポピュリズムそのものが権威主義的性格を有するとされていたが、ミュデラの批判を受け、2019年の著作では「権威主義的ポピュリズム」に議論が限定された）。つまり、個人の自由や自己決定、男女平等、人種のない性的マイノリティの尊重などの動きの拡大に対する反発として、ポピュリズムを説明したのである（とはいえ、古賀（2019）が実証したように、西欧の右翼ポピュリスト政党は、移民への態度などで「権威主義的」姿勢を示すものの、社会的な争点については特段「反動的」と呼べない）。

もちろん、経済的説明と文化的説明は相互排他的ではない。むしろ、両者を組み合わせて説明の方が妥当だろう。また、ポピュリズム（とりわけ右翼のそれ）の台頭を考える際に「移民」が重要となってくるのは、それが経済的要因にも文化的要因にも関わる存在だからだと言えよう。

加えて、晩年のピーター・メアの研究が指摘した、現代の代表制民主主義における「応答（responsiveness）」と「責任（responsibility）」のあいだの緊張関係は、ポピュリズムの台頭を考えるにあたって重要である（Mair 2009; 2013）。たとえば、グローバル市場や国際制度の影響力の増大は、国家レベルの政治アクターの行動の余地を限定する。そして、その反動がポピュリズムとなって現れるのである（欧州通貨同盟が強いる緊縮政策の反発としての左派ポピュリズムなど）。

これと親和性のある説明として、左右の主流政党の収斂が、ポピュリズムの台頭をもたらしたという議論もある。関連して、ラクラウヤムフは、非政治化ないし脱政治化された自由民主主義に対するラディカルな民主主義的オルタナティブとして、積極的に「左派ポピュリズム」を唱道している（ムフ2019；山本2016；ラクラウ2018）。

以上からもわかるように、ポピュリズムの台頭を理解するには、ポピュリスト政治家（「供給側」）だけでなく、支持者（「需要側」）も分析する必要がある。また、ポピュリズムを取り巻く環境、すなわち国際制度や国内の政治構造、あるいは保守政党など「主流」のアクターにも注目する必要がある。

## VIII. おわりに

ポピュリズムは、実際に一部の人びとが「代表」されていないことを可視化する。それを明確にするには有益な存在なのかもしれない。ポピュリズムに衝撃を受けた既成政党が、政治を「再活性化」させることもあろう。あるいは、人びとの政治参加を促すかもしれない（水島2016：227-229）。とはいえ、それが民主主義にもつ危険性も、本稿で指摘してきた通りである。

現代世界において、「民主主義」を真っ向から否定する者はほぼいなくなった。しかし民主主義は、ポピュリズムという、「人民」の「一般意志」の実現——それはフランス革命以来の民主主義のひとつの理想であった——を装った勢力によって、危機に晒されている。安易なレッテル

貼りに陥らず、自分が「ポピュリズム」という語で何を言いたいのかを吟味すること。そして、いかなる意味で民主主義の危機なのかを言語化すること。いまは、そうした政治的な判断力が試されているときなのであろう。

## 参考文献

- 池本大輔 2018年「ポピュリズムの挑戦とEU」佐々木毅（編）『民主政とポピュリズム——ヨーロッパ・アメリカ・日本の比較政治学』東京：筑摩書房（筑摩選書）、16-29頁。
- 古賀光生 2019年「西欧の右翼ポピュリスト政党の台頭は、「文化的な反動」によるものであるのか？——政策の比較分析から検討する」『年報政治学』2019- II号：84-108頁。
- 庄司克宏 2018年『欧州ポピュリズム——EU分断は避けられるか』東京：筑摩書房（ちくま新書）。
- 田中拓道 2020年『リベラルとは何か——17世紀の自由主義から現代日本まで』東京：中央公論新社（中公新書）。
- ダニエル、ウーテ 2019年「政治的言語とメディア」アンドレアス・ヴィルシングほか（編）『ナチズムは再来するのか？——民主主義をめぐるヴァイマル共和国の教訓』板橋拓己・小野寺拓也監訳、東京：慶應義塾大学出版会、33-49頁。
- 水島治郎 2016年『ポピュリズムとは何か——民主主義の敵か、改革の希望か』東京：中央公論新社（中公新書）。
- 水島治郎 2020年「中間団体の衰退とメディアの変容——「中抜き」時代のポピュリズム」同（編）『ポピュリズムという挑戦——岐路に立つ現代デモクラシー』東京：岩波書店、26-53頁。
- ミュデ、カス／カルトワッセル、クリストバル・ロビラ 2018年『ポピュリズム——デモクラシーの友と敵』永井大輔・高山裕二訳、東京：白水社（Mudde, Cas / Kaltwasser, Cristóbal Rovira. 2017. *Populism: A Very Short Introduction*. New York: Oxford University Press）。
- ミュラー、ヤン＝ヴェルナー 2017年『ポピュリズムとは何か』板橋拓己訳、東京：岩波書店（Müller, Jan-Werner. 2016. *What Is Populism?* Philadelphia: University of Pennsylvania Press）。
- ムフ、シャンタル 2019年『左派ポピュリズムのために』山本圭・塩田潤訳、東京：明石書店（Mouffe, Chantal. 2018. *For a Left Populism*. London: Verso）。
- 山本圭 2016年『不審者のデモクラシー——ラクラウの政治思想』東京：岩波書店。
- ラクラウ、エルネスト 2018年『ポピュリズムの理性』澤里岳史・河村一郎訳、東京：明石書店（Laclau, Ernesto. 2005. *On Populist Reason*, London: Verso）。
- Albertazzi, Daniele / McDonnell, Duncan. 2015. *Populists in Power*. Abington: Routledge.
- Eatwell, Roger / Goodwin, Matthew J. 2018. *National Populism: The Revolt Against Liberal Democracy*. London: Pelican.
- Finchelstein, Federico. 2017. *From Fascism to Populism in History*. California: University of California Press.
- Gagnon, Jean-Paul / Beausoleil, Emily / Son, Kyong-Min / Arguelles, Cleve / Chalave, Pierrick / Johnston, Callum N. 2018. "What is populism? Who is the populist? A state of the field

- review (2008-2018).” *Democratic Theory*, Vol. 5, Issue 2: vi–xxvi.
- Hawkins, Kirk A. / Carlin, Ryan E. / Littvay, Levente / Kaltwasser, Cristóbal Rovira eds. 2018. *The Ideational Approach to Populism: Concept, Theory, and Analysis*. London: Routledge.
- Heinisch, Reinhard C. / Holtz-Bacha, Christina / Mazzoleni, Oscar eds. 2017. *Political Populism: A Handbook*. Baden-Baden: Nomos.
- Inglehart, Ronald / Norris, Pippa. 2016. “Trump, Brexit, and the Rise of Populism: Economic Have-Nots and Cultural Backlash.” HKS Working Paper No. RWP16-026, August 2016.
- Ionescu, Ghița / Gellner, Ernest eds. 1969. *Populism: Its Meanings and National Characteristics*. London: Weidenfeld & Nicolson.
- Kaltwasser, Cristóbal / Taggart, Paul A. / Ochoa Espejo, Paulina / Ostiguy, Pierre eds. 2017. *The Oxford Handbook of Populism*. Oxford: Oxford University Press.
- Kriesi, Hanspeter. 2014. “The Populist Challenge.” *West European Politics*, Vol. 37, Issue 2: 361-378.
- Kriesi, Hanspeter / Pappas, Takis S. eds. 2015. *European Populism in the Shadow of the Great Recession*. Colchester: ECPR Press.
- Mair, Peter. 2009. “Representative versus Responsible Government.” MPIfG Working Paper 09 / 8.
- \_\_\_\_\_. 2013. *Ruling the Void: The Hollowing of Western Democracy*. London / New York: Verso.
- Manow, Philip. 2018. *Die Politische Ökonomie des Populismus*. Berlin: Suhrkamp.
- Moffitt, Benjamin. 2020. *Populism*. Cambridge: Polity (Key Concepts in Political Theory).
- Mudde, Cas. 2017. “Populism: An Ideational Approach.” in: Cristóbal Rovira Kaltwasser / Paul Taggart / Paulina Ochoa Espejo / Pierre Ostiguy eds. *The Oxford Handbook of Populism*. Oxford: Oxford University Press: 27-47.
- Mudde, Cas / Kaltwasser, Cristóbal Rovira. 2018. “Studying Populism in Comparative Perspective: Reflections on the Contemporary and Future Research Agenda.” *Comparative Political Studies*, Vol. 51 (13): 1667-1693.
- Norris, Pippa / Inglehart, Ronald. 2019. *Cultural Backlash: Trump, Brexit, and Authoritarian Populism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Noury, Abdul / Roland, Gerard. 2020. “Identity Politics and Populism in Europe.” *Annual Review of Political Science*, Vol. 23: 421-439.
- Ostiguy, Pierre. 2017. “Populism: A Socio-Cultural Approach.” in: Cristóbal Rovira Kaltwasser / Paul Taggart / Paulina Ochoa Espejo / Pierre Ostiguy eds. *The Oxford Handbook of Populism*. Oxford: Oxford University Press: 73-97.
- Pappas, Takis S. 2016. “Modern Populism: Research Advances, Conceptual and Methodological Pitfalls, and the Minimal Definition.” *Oxford Research Encyclopedias* (<https://bit.ly/2lk32Ak>).
- \_\_\_\_\_. 2019. *Populism and Liberal Democracy: A Comparative and Theoretical Analysis*. Oxford: Oxford University Press.
- Rooduijn, Matthijs. 2019. “How to study populism and adjacent topics? A plea for both more and less focus.” *European Journal of Political Research*, Vol. 58, Issue 1: 362-372.
- Torre, Carlos de la ed. 2019. *Routledge Handbook of Global Populism*. London: Routledge.
- Weyland, Kurt. 2001. “Clarifying a Contested Concept: Populism in the Study of Latin American

Politics." *Comparative Politics*, Vol. 34, No. 1: 1-22.

\_\_\_\_\_. 2017. "Populism: A Political-Strategic Approach." in: Cristóbal Rovira Kaltwasser / Paul Taggart / Paulina Ochoa Espejo / Pierre Ostiguy eds. *The Oxford Handbook of Populism*. Oxford: Oxford University Press: 48-72.